

のことを評して「作中に登場させる人物たちをあたかも人形が将棋のコマのように扱っ」ていて、さらに「心理とか感情とかは一切みとめない。物として処理する」タイプの作家だと書いているのだけい、それを読んだときわたしは、さっきまで読んでいた『樫山節考』と、この解説の人の言う『樫山節考』が同じものだとはちよっと思えなかった。本当に人間はそれぞれ別のものを別のしかたで見ている。

わたしは二〇一九年から二〇二〇年にかけて毎日小説の断片を書いていた。ルーズヴィットの端に「移動の日は事は天幕の解体からはじまる」と書いて『それ』が動き出してから365日間、わたしは何だかわからないけど書く動きの中にいて、その期間中、ツイッターの深沢七郎もそが不定期につぶやく一文に何度も励まされていた。

「他人に読んでもうったり、見てもううのではなく自分のためにすることです。」

これの出どころは『人間滅亡の人生案内』だと書いてあったから、励まされるのが10回目くらいになったところでいい加減この本買おうとなり、文庫版を通販で買った。ジャケのイラストが湯浅学さんだった。かつて『話の特集』という雑誌に連載されていた質問コーナーを一冊にまとめたもので、深沢七郎の「回答」はどれもおもしろかったけど、次から次へと同じ形式の似たような質問ばかり出てくるもんだから途中でだいたいが面倒くさくなってきてしまって、もういいかな……とか思いつながり飛ばし読みしていたら最後のほうに著者のあとがきのような「小さな質問者たち」という章があったからそこで手を止めて読んでみると、「しまいには同じような質問のくりかえしになってしまったので『話の特集』につづけていくことが出来なくなりました」と書いてあった(笑)。文庫版ではこのあとがき的なものの次に「深沢七郎の薄情」という題の解説が載っていてそれを書いたのは山下澄人さんなのだけど、わたしは解説がついていることなどまったく知らずにこれを買っていた。

「深沢七郎にとって人間の生き死には虫の生き死にと変わらない。たいした